

---

# 闘鬼神誕生

猫目石

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闘鬼神誕生

### 【Nコード】

N9534S

### 【作者名】

猫目石

### 【あらすじ】

闘鬼神が誕生する経緯いきさつを小説にしてみました。  
隻腕シリーズの二作目です。

人間の小娘を拾った。

「……いや、娘と言うのもおこがましいか？  
何しろ年端もいかぬ童女だ。」

本来ならば、母親に、まだ世話されている筈だ。  
年の頃は、精々、五つか六つであろう。

妖狼どもに噛み殺され息絶えた命を冥府から天生牙で呼び戻した。  
己が初めて自分の意思で天生牙を振るつた命だ。

拾い上げた以上、捨てる訳にもいかぬ。  
だが、人間の子供の事など何も知らぬ。  
面倒なので下僕の邪見に世話を任せた。

あ奴は不平不満を垂れ流しながら子供の世話を始めた。  
それにしても騒々しい。  
何事だ。

幼子と下僕とが先を争って私に向かって駆けてくる。  
口々に喚き立てながら。

「殺生丸さまっ！ 殺生丸さまっ！」

「殺生丸様~~~~~っ！」

幼子は雛特有の高い、だが愛らしい声で。

下僕は耳障りな聞き苦しい声で。

互いが必死に何事か私に訴えてくる。

一体……何だというのだ。

「殺生丸様っ！ りんの奴に言い聞かせてやって下さいませ！」

「今日は灰刃坊の許に打ち上がった刀を取りに行く故、一緒には連れて行けぬ、と！」

邪見めが口というか嘴くちばしか？

唾を飛ばさんばかりに捲まくし立ておる。

只でさえ悪い顔色が赤くなって、どうにもこうにも表現し難い顔色になっている。

見苦しい。

りんは、と言えば、こちらは血色のよい薄紅色の頬を思いつきり膨らませている。

どうやら一緒に行きたいと駄々をこねているらしい。

「……りん、大人しく待っている」

拾い上げた時から、りんは己の意思に逆らった事はない。

「……はい」

少し、しょんぼりしつつ素直に頷いた。

今から赴く先は火山地帯で溶岩が絶えず流出している。

有毒な気体をか弱い人の仔が吸えば即座に命を落としかねない危険な場所なのだ。

そんな所に、りんを連れて行く訳にはいかない。

刀々斎の弟子とはいえ余りにも邪悪な剣を打つが故に破門された程の曰くつきの刀鍛冶だ。

何が起きるやも知れぬ。

安全な場所で待たせる方が良からう。

近くに林のある野原にりんを置いていった。

花でも摘んで遊んでいる。

邪見を供に阿吽に乗って空を往く。

目的地は鼻をつく臭いで満ちた悪しき場所だ。

先触れに行かせた邪見が戻って来ない。

殺生丸は灰刃坊の住処に脚を向けた。

誤って迷い込んだ獣達が有毒な気体を吸い込み無残にも骨だけの骸を晒している。

不気味な場所に相応しく荒れ果てた灰刃坊の工房兼住まい。

一步、脚を踏み入れてみれば己の下僕が見事に真っ二つに両断されている。

「・・・灰刃坊の仕業か」

天生牙を鞘から抜き放ち死体に纏わり付くあの世からの使いどもを斬って捨てる。

邪見が息を吹き返した。

尤も、まだ体は両断されたままだが。

「あれ・・・？」

「儂は確か灰刃坊に斬られて・・・」

「って、やっぱり・・・」

「行くぞ、邪見」

「サッサと体をくつつけろ」

いつもの無表情な殺生丸の言葉。

「・・・殺生丸様・・・？」

「あの・・・もしや・・・天生牙で儂の命を救って救ってくださったので？」

「私の他にこんな事の出来る者がいるか」

ジ~~~~ン!  
儂感動・・・殺生丸様!

「灰刃坊は刀を仕上げたのか？」

「そ、そうでした。灰刃坊は鬼の牙から剣を打ち起こしたと・・・」

「それが、あ奴、何やら目つきが、おかしくて・・・」

「まるで・・・まるで剣に操られているような・・・」

成る程、灰刃坊の奴、どうやら自らが打ち起こした刀に取り憑かれたようだな。

あの牙は犬夜叉に倒された鬼の物。

という事は復讐の為に灰刃坊に取り憑きあの半妖の許へ向かったという訳か。

丁度良い、あ奴に確かめたい事もある。

「邪見、阿吽を連れて来い。灰刃坊を追うぞ」

そうと判れば、もう、このような場所に用はない。

殺生丸は踵かかとを返し工房を後にした。

あれほどの邪気を撒き散らす刀と刀鍛冶の匂いを辿るのは容易き事。阿吽を駆りつつ目的の場所へと急ぐ。

次第に邪気が強くなってきた。

見えた！

阿吽を急降下させつつ雷撃を見舞う。

ドオオオン!!!

殺生丸は音も無く静かに地に降り立った。

雷撃の直撃を受けながら鬼の刀は刃こぼれ一つ無く地面に突き刺さっている。

これならば鉄碎牙にも引けを取るまい。

「な・・・」

「殺生丸！」

「何で、てめえが、此处に・・・」

半妖が喚き散らす。

「それは、こちらの台詞だ」

「私は、この剣を追ってきただけだ」

「どうやら、貴様に殺された鬼は・・・剣になっても、尚、貴様に復讐したかったようだな」

「なっ……」

（殺生丸、こいつ……そんな事を何で知ってる……？闘鬼神が悟心鬼の牙で出来ている事を知っている、という事は……）

「灰刃坊に剣を打たせたのは私だ」

平然と殺生丸は事実を告げた。

「殺生丸っ！闘鬼神に触れてはいかん！」

刀々斎が犬夜叉の後ろに隠れて喚く。

「いくら貴様でも、闘鬼神の邪気にあてられたら、灰刃坊同様、取り憑かれて……」

刀々斎の必死の説得を、片腹痛いとばかりに無視して殺生丸が闘鬼神を手取る。

「貴様、私を誰だと思っている」

何と、見る間に、あれ程の禍々しい邪気が収束していく。  
殺生丸の妖気が鬪鬼神の邪気を抑え込んだのだ。  
桁外れの妖力と言って良いだろう。  
呆れて物も言えない刀々斎であった。

(もお~~~~やだ!.....こいつ)

「ふっ……剣も使い手を選ぶという事だ」

「抜け、犬夜叉」

「貴様に確かめたい事がある」

(俺に確かめたい事だ!?!.....こいつは何を言っているんだ)

「やめて! 犬夜叉」

かごめが必死に止めようとする。

「下がってる、かごめ」

「おめえ、勝てると思ってんのか？」

刀々斎も心配そうに俺を窺がう。

「けっ、待ってくれと言っても聞く相手じゃねえだろ」

(・・・やるしかねえな)

「そういう事だ」

「かかってこい、犬夜叉」

「来ないなら、此方「ちむ」から行くぞ」

疾風の如く襲い掛かる殺生丸の斬撃。

迎え撃つ犬夜叉の鉄碎牙。

だが、打ち直した鉄碎牙の重さは半端ではない。

犬夜叉には持ち上げるのがやっとだった。

風切り音が宙を裂く。

ゴオオツ！！

熾烈な打ち込みを鉄碎牙で必死に受け止める。

だが闘鬼神の剣圧は凄まじく、ビシビシと容赦無く犬夜叉にかすり傷を負わせる。

「やっぱり、受けるのがやっただわ!」

かごめが叫ぶ。

「しかも剣庄に負けとる」

七宝も、かごめの肩に乗りつつ犬夜叉の身を案じる。

「マズイな、もお~~~~」

刀々斎は圧倒的に犬夜叉に不利な状況を見て取った。

「今の犬夜叉では勝ち目は無いと!?!」

弥勒が戦況を量りながら刀々斎に尋ねる。

「だ~~~~って、あいつ、鉄碎牙、振れねえじゃん」

(それにしても、まいったな)

只でさえ物騒な剣・・・闘鬼神。

よりもよって殺生丸の手に渡っちまうとは・・・。

それぞれの思惑が交錯する中、殺生丸も符に落ちぬ物を感じていた。やはり・・・只の半妖の血の匂いしかしない・・・。

だが、あの時、悟心鬼と闘いながら犬夜叉の血の匂いは確かに変わった。

それが、どういう事なのか。

この目で、しかと見極めてくれるわ。

(一振りで決めねえと・・・やられる！)

重すぎる鉄碎牙を持って余し持ち上げる事すら、やっとの今の状況では、犬夜叉がそう判断するのも無理はなかった。

だが、殺生丸は恐ろしく強い。

果たして、それが通用するか、どうか？

「闘い方を変えたのか？ 犬夜叉」

「いつもは、やたら振り回してくるお前が・・・」

「くっ・・・」

(もう何か勘付いてやがる・・・殺生丸の奴)

(迷ってる暇はねえっ！やらなきゃやられる！！)

「やかましいっ！」

渾身の力を込めて重い鉄砕牙を振り下ろす犬夜叉。

鉄砕牙と闘鬼神、互いの剣圧がぶつかり合う！

衝撃波が宙空に走る！

だが、重い鉄砕牙を扱いかねている犬夜叉は充分に剣の威力を引き出す事が出来ずにいる。

当然、防御力の結界も弱まる。

その分、闘鬼神の剣圧のあおりを受けて確実にかすり傷が増えていく。

それに引き換え殺生丸の方は傷ひとつ無い。

完璧に闘鬼神を使いこなしている証拠だ。

・・・ギリギリと剣の押し合いが続く。

「ほお・・・鉄砕牙が少し重くなったのか」

「す・・・少しじゃねえ、馬鹿野郎！」

「ふん！手に余る刀など・・・」

「持たぬ方がマシだ！」

殺生丸が闘鬼神で鉄碎牙を弾き飛ばした！  
ガシューッ！  
ギューワン！

「鉄碎牙が弾き飛ばされた」

何という馬鹿力だろう。

流石は犬夜叉の兄。

弥勒は舌を巻く思いだった。

この兄弟の喧嘩はスケールが違いすぎる。

「犬夜叉！」

「いかん、まるで大人と子供じゃ」

見ているかごめと七宝も気が気ではない。

鉄碎牙もろ共、投げ飛ばされた犬夜叉は何とか体勢を立て直したものの鉄碎牙を手に取りうとはしない。

変化を解かれた鉄碎牙は元のボロ刀に戻っている。

「犬夜叉さまっ、は、早く、鉄碎牙を拾いなされ」

ノミ妖怪の冥加が必死に叫ぶ。

「冥加じじい……」

(駄目だ！ 今の遣り合いで充分過ぎるほど判った。とてもじゃないが、あんな重い鉄砕牙を振るう事はできねえっ！……ならばっ！)

「いらねえ！」

犬夜叉が丸腰で殺生丸に向かって行った。

「だめよ、犬夜叉！」

「丸腰で殺生丸とやりあう気が!?!」

かごめと七宝が止めようとするが言う事を素直に聞くはずも無い。冥加も必死に諫めるが効果は無い。

「犬夜叉さま、ヤケになってはいかん」

「あんな重い刀じゃ勝てる喧嘩も勝てねえ！」

(犬夜叉め、無謀にも刀も持たずに己に向かって来るとは……)

「身の程知らずが」

闘鬼神をピタリと半妖に向け、闘気を高め剣圧として放った。

衝撃で吹き飛ばされる犬夜叉。

更に血があちこちから噴き出す。

叢くさむらに蹲すくまる犬夜叉。

「この野郎……」

(このままじゃ……やられる!!何か……体の中から……  
噴き出してくる。死んで堪るもんか。まだ……意識が薄れていく)

…ドクン…ドクン…ザワザワと犬夜叉の体内の血が騒ぎ出す。

「半妖は、所詮、半妖か……」

「もういい、死ね！犬夜叉」

闘鬼神を今にも振りかざそうとした、その刹那、犬夜叉の血の匂い  
が変わった。

妖気が・・・変わった。

・・・いつもの半妖の血の匂いではない！？

殺生丸が一瞬、ためらった隙を突いて炎が周囲に燃え広がる。

ゴオオツツ〜ゴオツツ〜

刀々斎が火吹きの術を使ったのだ。

辺りの草は晴天続きのせいもあり劫火に変わる。

バチバチと炎が燃え爆ぜる音。

気が付いてみれば、もう、犬夜叉達は居なかった。

残り火がチロチロと消えそうに残る焼け跡で、殺生丸は、先程の事  
を思い返していた。

「いや、流石は殺生丸様、お強いっ」

いつもの邪見のお追従を上の空で聞き流す殺生丸。

「しかし、あそこまで追い詰めておきながら何で追いかけなかつた  
ので？」

「・・・・・・・・」

「殺生丸様？」

無言の主に不思議そうに尋ねてみるが応えはない。

この殺生丸に・・・一瞬でも恐れを感じさせるとは・・・。

あの時の犬夜叉は・・・。

「・・・戻るぞ、邪見。」

「ははっ！ 阿吽を連れてまいりますっ」

りんが待ちくたびれているだろう。

あの辺りに危険な様子は無かったが。

童女は幼さ故に好奇心が強く下僕が肝を冷やすような事をチヨクチヨク仕出かす。

ひとまず用事は片付いた。

・・・犬夜叉の変化については又の機会に探るとしよう。

りんは、いつも通りに花を摘みながら己を待っていた。

己の姿を見た途端に名前を呼び駆け寄ってこようとした。

「りん、動くな」

・・・ピタリと静止する幼子。

フワリと瞬時に十間（一間＝1.82m）ほどの距離を跳び樹木に身を隠した怪しい影を切る。

闘鬼神の斬撃をかわしたのは見た事も無い女。

・・・だが・・・この臭い。

「覚えのある臭いだ。……以前、私を陥れようとした奈落とかいう喰わせ者と同じ……」

女は怖れる様子もなく私に話しかけてきた。  
婀娜<sup>あだ</sup>っぽい遊び女のような姿をしている。

「ふうん、あんたが犬夜叉の兄貴の殺生丸かい」

「やさ男だねえ」

「あたしは風使いの神楽。」

「奈落の分身みたいなもんさ」

「分身だと？」

道理で、あの喰わせ者と同じ臭いがする訳だ。

「そう……そして……あんたが持つてる剣に使った悟心鬼って奴も」

「あたしと同じ奈落の分身さ」

事も無げにサラリと事実を口にする女。

「だから、どうした」

「刀を返せとでも云いにきたのか」

何を探りに来た？

それに不快な・・・この臭い。

「ふん、奈落の野郎は殺された鬼になんか未練はねえさ」

「あたしは勝手に悟心鬼の末路を見届けに来ただけ」

「ねえ・・・あんた、強いんだろ？」

何が言いたいのだ・・・この女は？

「あんななら、もしかすると・・・奈落を殺せるかもしれないね」

「・・・・・・・・」

どうやら、この女は分身ではあるが奈落を殺したいらしい。

ゴオオッ！

風を巻き起こし大きな羽根に乗り女は去って行った。

「胡散臭い女でございますなあ」

邪見が女の去って行った方を身ながら呟く。

「・・・・・・・・」

奈落の事といい覚えておく必要があるかも知れん。

りんは私の言いつけのままに身じろぎ一つせずジッとしている。

「りん」

「もう、動いていい」

己の言葉を聞き、りんが、やっと片足立ちの体勢を解いた。

「あつ、はいっ」

邪見などより、りんの方が、余程、聞き分けが良い。

それにしても、あんな女に言われずとも、奈落如き、今度、私の周りをうるついたら斬って捨ててくれるわ。

先程の神楽と名乗った女とのの遣り取りを思い返しながら殺生丸は闘鬼神の柄を握り締めた。

闘鬼神には鞘が無い。

灰刃坊は、勿論、当初は鞘を付けるつもりであっただろう。

しかし、刀を打ち起こしたその時点で、もう、悟心鬼の怨念に取り憑かれ以後は刀の命ずるままに行動していたのだろう。

邪見を手討ちにしたのが、その証拠だ。

フツ、鞘もなく剥き出しの刀身のままの剣。

見るだに荒々しい邪気を纏う剣。

それも、また鬼の剣に相応しかろう。

鬼神の如く闘おう、この剣に冠された名のままに。

殺生丸は知らない。

今後、自らが奈落や犬夜叉達と深く拘わりあうようになる事を。

闘鬼神と共に数々の死闘を潜り抜ける事になる未来を。

これ以後、常に殺生丸の腰には二振りの刀が佩かれる事になった。

一振りは癒しの刀、天生牙。

もう一振りは鬼の牙から打ち出した闘鬼神、鬼の剣である。

了

2006.5/15(月) 作成

(後書き)

《第3作目「鬪鬼神誕生」についてのコメント》

この第二作目は、全然、思い通りにならなくて。本当は、りんちゃんと邪見とのホノボノ話でも書こうと目論んでたんです。

それなのに、イザ書き出してみると、チツとも思う方に話が進んでいかない。

遂に諦めて小説の神様？の言う通りに原作を引っ張り出してきて書き上げた物です。

尚、三作目は上手く書けなくて放置中です。

このままズ〜〜ットそうだったりして。

2006.8/9 (水)

猫目石

当時のコメント通りに三作目はズツと放置。結局、完成せず削除しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9534s/>

---

闘鬼神誕生

2011年5月12日09時53分発行